煙草の精(仮)

老兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
煙草の精（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９２９８Ｒ

【作者名】
老兵

【あらすじ】
私が煙草に火をつけると、煙草の精を自称する少女が現れる。曰く、煙草一本につき一つ、願いをかなえてくれるというのだが、半人前である煙草の精はかなえることのできる願いが限られていた。そんな煙草の精と話し合っているうちに、願い事も決まらぬまま煙草は燃え尽きて煙草の精も消える。

一本目（前書き）

プロットも考えずに、とりあえずキーボードに指を這わせて書きました。果たして完結するのでしょうか。もしも読んでくれる人がいたら生温かく見守ってやってください。

一本目

一本目

花粉症の季節、私のような「室内では煙草を吸いたくない」人間が陥るものといえば、室内で一服するか、あるいは花粉が吹きすさぶ外で一服するかというジレンマである。禁煙するべきか、という考えはどうかというと、私には毛頭ない。

最近は最早諦めて室内で吸うようにしている。流しの所にある換気扇の前で吸うのだが、そんな自分を客観視すると大変みすぼらしい。解放感溢れる外で吸いたいものだ。そんな事を考えながら私は煙草の封を切り、愛用のシガレットケースに入れると換気扇の前へ向かった。

「ひゃあああああ　切ってください！　換気扇切ってください！」

煙草に火を付けた途端に、そんな女性の声がしたものだから驚いた。周りを見ても、そこにはやもめ暮らしに蛆が湧いたいつもの私の部屋が広がるのみ、誰もいる様子はない。私は訝しみながらも換気扇を消すことにする。すると、私が吸っていた煙草の煙が人の形を成してきたではないか。すぐに輪郭がはっきりしてきた。上半身は渋いレザージャケットを着用しているが、あどけない顔立ちのせいでいまいち着こなせていない。下半身は煙草の先に直結しており、人の形を成していない。まるで某ランプの魔人だな、と私は思った。

「おめでとうございます！　魔法の煙草を吸うことにより、一本につき一つ、あなたの願い事を叶えちゃいます！　私、煙草の精（見習い）と申します」

外で喫煙出来ないストレスで幻覚でも見るようになったのだろうか。気味が悪いので煙草を消そうとすると

「わーっ！　消さないで！　最後まで聞いてください！」

「……色々と聞きたいことはあるが、とりあえずその（見習い）というのは何だ？」
「私はまだ精霊として半人前なので、一人前になるまでは修行として対価の支払い無しに人間の願いを叶えて回るのです。ささ、願い事を」
「外で煙草が吸いたいんだ。とりあえず私の花粉症を治してくれ」
「申し訳ありません。それはできません」
「じゃあ杉花粉の存在そのものを消してくれ」
「申し訳ありません。それもできません」
「ならこの室内にこもっている煙草の臭いをなんとかしてくれ」
「……申し訳ありません。私はまだ見習いなんで大したことは出来ないんです」彼女はどんどん小さくなっていく。
「じゃあいいや」
「わーっ！　待って！　だから消さないで！」
「ならどんな願いごとなら叶えることが出来るんだ」
「この煙をある程度自由に動かせたりできます」
「それだけ？」
「申し訳ありません」少し責め過ぎたのか、彼女は暗い面持ちでそう答える。彼女に対する後ろめたさも無いわけでは無いので、私は話題を逸らすことにした。
「やはり最後の願いは“煙草の精を自由……」
「わーっ！　それは止めてください！　私達はあなたがた人間と違って、存在理由自体が生存に関わってくるのです。意味もなく生きる事が可能なあなたがたと一緒にしないでください。それにですね……あ！」
　煙草が燃え尽きると同時に、煙草の精と名乗る奇怪な少女も消えた。願い事は叶わないうえに最後の方はなんだか人間を馬鹿にされたような気もする。幻覚を見るのならもっと楽しいものでも良いではないか。

二本目

昨日の摩訶不思議な出来事は幻覚だとして、今日も今日とて換気扇の前で煙草に火をつける。

「いやあああああ！　だから換気扇消して！　消してください！　聞こえてますか？　ていうか聞いてますか？」

幻覚はまだ続いているらしい。そういえば声も聞こえるから、これは幻聴も含んでいるのかもしれない。これは禁煙せよという神からのメッセージであろうか。

「ええい、くらえ！」

換気扇に景気良く吸い込まれていた煙が、いきなり私の鼻めがけて殺到してきた。喫煙者でも副流煙をまともに吸いこんだらたまらない。私は激しくせき込み、侵入してきた煙を追い出す。観念して換気扇も止める。

「話を聞かないからです」

「それにしてもやり方がえげつない」

「ちなみに今ので願い事に使う魔力を使ってしまいました。願い事は三本目からにしてください」少女の形をした煙が、さらりと嫌なことを言った気もするが、ここは我慢してこの摩訶不思議な存在との対話を試みる。

「その願い事なんだが、悪いことに使ってはいけないというルールはないのか？」

「ありません。でもそんな願い事をされたら軽蔑します」

「構うものか」

「何か良からぬことを企んでますね」

私は通っている大学にて、読書好きが時々集まってぐだぐだと喋るだけという読書サークル『読書愛好会』に所属している。

一年前、私が『読書愛好会』に入部して間もない頃にそれは起こ

った。それまで分化系サークルのノリで花見を楽しんでいた、同じ新入生の中島という男が、私の読書について傲然と批判をし始めたのだ。曰く、ライトノベルなんぞを読んでいると頭が悪くなる。そして自分は新品の本でないと読む気になれないし古本ばかり漁っていると業界に悪影響である、と。私は普通の本もライトノベルも平等に扱う（そもそも区分けするべきものではない）人間であり、中島の言うような古本ばかり漁る人間である。よろしいならば論争だ。入部早々、いや入部前から侃々諤々の口喧嘩が始まるかとも思われたが、その日は先輩に諌められた。以来、私と中島は仲直りするわけでもなく、レールのようにいつまでも平行を保って交わることはなかった。

そうだ、奴が後生大事に抱えている蔵書を、古本屋の特売コーナーに時々置いてあるような煙草臭い本にしてやろうか。この、煙草の精を名乗る存在でもそのくらいは出来るだろう。読書処女主義とでも言うべき曲がった性根を叩きなおす良い機会である。

「……あなたの考えは読ませてもらいました」

「そんな時だけ超人的な能力使うのは止めてもらえないか。というか人の考え読めるのか」

「あなたも読書好きなら本の大切さが分かるはずです。あなたの考えはまるで、復讐の対象ではなくその身近な人間に危害を及ぼす下衆な悪役の考えです。あと人の考えはあなたのものしか読めません」

「ぐ……確かに正論だ……」

「それでも実行すると仰るのなら、やりますけど」

「そう言われるとやりにくい。お前最初に会ったときと印象変わったな」

「愛想を振りまき続けるのは不得意なもので」

「ああ、いるいるそういう人」

「私の本性よりも、その中島という人に直接私が突入してですね
……」
「そっちの方がえげつないだろう」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9298r/

煙草の精(仮)

2011年10月8日21時59分発行